

平仮名学習入門期の書字について

～ 読み・聴写・視写の比較から ～

(教育学研究科特別支援教育専修) 石川 侑香
(教育学研究科特別支援教育専修) 谷岡 真衣
(障害児教育講座) 菊田 知則

Handwriting in Acquiring Japanese Hiragana through the Tasks of Reading, Dictation and Copying Letters

Yuka ISHIKAWA, Mai TANIOKA and Tomonori KARITA

(平成19年6月8日受理)

1. 問題と目的

平仮名学習入門期にあたる幼児は、「く」や「し」の“開き”の向きを逆に書いたり、「す」や「ま」の“結び”の部分左右逆に書くことがある。これはちょうど文字を鏡に映した時に見られる形態で、鏡文字と呼ばれている。国立国語研究所の全国調査(1972)によると、幼児による平仮名の書字の誤りのうち、最も多い誤りが鏡文字で、全体の誤りのうちの約30%を占めている。また、通常の学級に在籍する1、2年生の中には、なお鏡文字を書いたり他の誤りを示したりなど、平仮名書字学習に困難をきたす子どももいる。大庭ら(1990)の研究では、書字学習困難児の出現率は、通常学級の1年生で0.92%であることが明らかにされた。

仮名学習入門期の書字に関する先行研究は、読みの研究に比して少ない。幼児期の文字の読みに関しては、音韻意識の発達と関連があることや(天野, 1986)、読みに必要な認知言語的能力が明らかにされている(小林, 2003)。一方、幼児期の書字に関しては、なぞりや視写の練習効果を検討し、書字技能を高める指導法が検討されているもの(小野瀬, 1987)、書字の習得過程の詳細や習得に必要な認知力は明らかにされていない点が多い。

書字能力を測定する場合、文字を認識し紙に書き写す視写と、音を正確に聞き取り音韻から文字を想起し紙に書く聴写では、必要とされるスキルや認知プロセスが異

なる。国立国語研究所の全国調査では、主に聴写を取り扱っており、視写や読みの達成状況との比較が行われておらず、幼児期の平仮名の習得段階を考察する上で課題が残されている。したがって本研究では、聴写、視写、読みの実験を実施し、達成状況を考察する。さらに、視写において、字形とストロークの正答状況を分析し、幼児期の平仮名の習得プロセスを、より詳細にすることを試みた。なお、本研究では、ストロークを文字の筆順と画要素を書く方向と定義し、文字を書く際に取られる手の動きは言及しないものとする。

2. 対象

愛媛県I市の公立保育所に在籍する幼児30名(4歳児:平均年齢4歳8ヶ月、男児4名、女児4名、計8名、5歳児:平均年齢5歳4ヶ月、男児5名、女児10名、計15名、6歳児:平均年齢6歳2ヶ月、男児3名、女児4名、計7名)を対象とした。

3. 方法

国立国語研究所の全国調査で明らかにされている各年齢の誤字率のデータをメタ分析し、4歳児、5歳児ともに書き誤りの多い文字を列挙した。これを参考に、4、5歳児に誤りの多い10文字(く、ほ、と、け、き、よ、さ、え、ん、つ)を材料に選んだ。これら10文字について、聴写、視写、読みの実験を行った。

聴写では、対象児は実験者が音声で提示した文字を聞き取り、記録用紙に鉛筆で書くことを求められた。記録用紙はA5用紙の白紙を用いた。視写では、対象児は文字の手本を見ながら記録用紙に書くことを求められた。また、視写において1文字書き終えるごとに、対象児は視写の正誤に関わらず、その文字を読むことを求められた。なお、視写の途中で対象児が自ら文字を読んだ場合は、再度読むことは求めなかった。

回答の正誤に関して、聴写と視写では字形が正しければ正答とし、字形の誤り及び無回答を誤答とした。評定は2名で行った。評定が分かれた回答は、協議の末、正誤を決定した。文字の筆順や画要素を書く方向の正誤に関しては、録画映像から判断した。

4. 手続き

2006年8月の2日間、保育所内の1スペースにて個別に聴写、視写、読みを行った。実験者は2名で、対象児に指示し実験を進める者と、対象児の様子をビデオ撮影し適宜教示を与える者という役割で行った。

5. 結果と考察

各年齢の聴写、視写、読みの課題達成数の平均を表1に示す。聴写、視写、読みの各課題ともに、正答は1点、誤答を0点として、達成数を算出した。各課題とも、すべて正答した場合は10点となる。

視写(成人型)とは、視写課題において、字形も正しく書き写すことができ、かつストローク(筆順や画要素を書く方向)も正しいものである。一方、視写(字形正答)

表1 聴写、視写、読みの課題達成数平均

	4歳	5歳	6歳
	mean (SD)	mean (SD)	mean (SD)
聴写	0.8 (2.10)	5.9 (3.29)	7.1 (3.43)
視写(字形正答)	4.0 (3.34)	8.6 (1.24)	7.9 (3.63)
視写(成人型)	1.0 (1.31)	6.2 (3.05)	6.1 (2.96)
読み	2.6 (4.31)	9.5 (1.81)	9.1 (1.86)

表2 各課題と年齢の相関

	年齢	聴写達成数	視写達成数(字形正答)	視写達成数(成人型)
聴写達成数	.736	-	-	-
視写達成数(字形正答)	.530	.742	-	-
視写達成数(成人型)	.683	.822	.766	-
読み達成数	.593	.741	.812	.782

とは、視写課題で正しい字形で書き写せたものの、ストロークは誤っているものである。

表1から、4歳児は聴写において、本実験で用いられた10文字のうち1文字を書くことも難しく、文字を想起して書くことがまだ難しい状態であると考えられる。読みよりも視写の達成数が多い。このことから、4歳児にとって、視写で提示された文字を書き写す作業は、文字を書き写すというよりむしろ記号や絵を書き写す作業のようだったと推測される。

5歳児、6歳児では、読みはほぼ達成されているが、視写は読みよりも正答数が低く、提示された文字を書き写す作業は幼児にとって容易ではないと考えられる。また、視写では、各年齢ともに字形は正しく書き写せているが、ストロークは成人のそれとは異なり、幼児に独特なストロークが多く見受けられた。

次に、各課題(聴写と視写、読み)と、年齢の相関を表2に示す。

表2から、すべての組み合わせにおいて、正の相関が認められ、書字と読みの関連があることが示された。

特に高い正の相関を示したのは、読み達成数と視写達成数(字形正答)、聴写達成数と視写達成数(成人型)だった。この結果から、視写の際、読むことができる文字数が多ければ視写ができる文字も多く、聴写ができる数が多ければ成人型の視写ができる数も多いことが示された。すなわち、それが何という文字であるか、及び、その文字が読めることが視写を成立させる要因の1つであることが示唆された。また、多くの文字を覚え、聞いただけで想起して書けるようになるにつれて、字形だけでなくストロークの正確さも高まると考えられる。これは覚えて書けるようになった文字が増えてくると、次の段階としてストロークの正確さも求められるようになり、大人が教えることも多くなるのではないかと推測される。あるいは、覚えて書字できる文字が増えるにつれて、文字の画要素は左から右に、上から下に書くといった平

表3 各年齢の聴写、視写、読みにおける課題正答者数

		く	ほ	と	け	き	よ	さ	え	ん	つ
4歳 (n=8)	読み	2	2	3	2	2	2	2	2	2	2
	聴写	0	1	0	1	1	1	1	0	1	1
	視写(字形正答)	2	2	3	5	3	3	3	2	3	6
	視写(成人型)	0	1	0	0	0	1	1	1	2	2
5歳 (n=15)	読み	14	15	14	14	15	14	14	14	14	15
	聴写	8	3	9	8	12	10	8	8	10	12
	視写(字形正答)	15	7	14	14	14	13	13	10	14	15
	視写(成人型)	14	7	5	9	9	8	8	9	10	13
6歳 (n=7)	読み	6	5	7	6	7	7	7	6	6	7
	聴写	5	4	5	5	6	5	5	5	5	4
	視写(字形正答)	6	4	6	6	6	5	6	5	5	6
	視写(成人型)	5	2	3	3	6	3	5	4	5	6

仮名の書字のルールが獲得されていくのではないかと考えられる。

年齢は、聴写達成数と正の相関が高かった。ただし、視写達成数(字形正答)及び読みとの相関は、中程度の正の相関であった。読みと年齢の中程度の正の相関が認められたことに関して、読みは少し読めるようになると一気に読字数が増えることが知られており(国立国語研究所, 1972)、本実験でも同様な傾向があると考えられる。また、年齢と視写達成数(字形正答)と正の相関も中程度であったことから、幼児は読めない文字でも、絵や図のように文字を写しているのではないかと推測された。

表3に、年齢ごとに聴写、視写、読みにおける課題正答者数を示す。

国立国語研究所の全国調査で、書き誤りが多いとされた文字は、本実験でも書き誤りが多かった。各年齢ともに正答者数が少なかったのは「ほ」であった。「ほ」に関して、4歳児では文字自体を書けない子どもが多く、5・6歳児では書いても右側上部を「ま」のように、つきだしてしまう誤りが目立った。鏡文字による誤りが最も多く出現したのが、各年齢ともに「く」であった。

「く」や「つ」のように画数も少なく、比較的単純な形である文字に関しては、字形もストロークも正しく視写できた者が多かった。しかし、「と」「け」「き」「よ」「さ」のように、画数が多く形も複雑な文字になると、字形は正しいものの、ストロークは誤っている者が多かった。

以上の結果から、文字習得のプロセスを「①文字を想

起して書くことも、文字を見ながら書き写すこともできない→②文字を想起して書くことはできないが、文字を見ながらであれば書き写すことができる→③文字を想起し、書くことができる」の3段階があると仮定すると、①が4歳以前、②が4歳頃から、③が5歳から6歳にかけてであると考えられる。本実験からは、少なくとも平仮名に関しては、5歳頃に音韻と文字との連関がうまくできるようになり、聴覚から入力された音韻を、文字としてスムーズに出力できるようになるのではないかと考えられる。

視写に関しては、読めることが視写を成立させる要因の1つであるが、読めない文字でも絵や記号のように写すことは可能である。また、字形を正しく写すことは5歳頃から可能になってくるが、成人のようなストロークで書くことは6歳になっても困難な場合がある。

このように、幼児の筆順や画要素の向きに関しては、6歳児でも誤っている場合も見受けられた上、幼児期に筆順や要素の向きまで教える必要があるのかという議論はあろうが、ストロークの提示によって、幼児の視写が成立したという報告もあり(小森, 2003)、今後はストロークの効果を検討する必要がある。また、視写に関して、本研究では文字を用いた課題のみを実施したが、図形の模写と書字の関連を検討することも今後の課題である。

謝 辞

本研究にご協力いただきましたI市の保育所の所長さんを始め、保育士さん、また、実験に参加して下さった園児のみなさんに感謝の意を表します。

文 献

- 天野清(1986)子どものかな文字の習得過程, 秋山書店.
- 大庭重治・佐々木清秀(1990)通常学級における平仮名書字学習困難児の実態とその指導形態, 特殊教育学研究, 28(2), 35-42.
- 小野瀬雅人(1987)幼児・児童におけるなぞり及び視写の練習が書字技能の習得に及ぼす効果, 教育心理学研究, 35(1).
- 国立国語研究所(1972)幼児の読み書き能力, 東京書籍.
- 小林マヤ(志帆)ら(2003)幼児の読み能力に関わる認知言語的能力, LD研究, 12(3), 259-267.
- 小森伸子(2003): 幼児期のかな文字視写を成立させる要因についての検討, 発達心理学研究, 14(1), 14-24.